

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年11月5日発行(毎月5日1回発行)
第44巻11月号(通巻544号)

風土

11

創刊45周年記念号



赤のまま

神蔵

器

担送車に今生の汗美しき
何も考へない秋蝶の翅使ひ
生きてをり旭の中にりんごの香
去るものは去らして烏瓜の花
りんだうを挿せば深山の風通ふ
たましひの離れてあそぶ月の萩

桂郎のすつぽん酔や月の庭
白ばかり咲かせて萩の花づくし
筆絶つて病臥一と月虫細る
振り向けば文珠の知恵や猫じやらし
里芋に花咲く生きる力欲し
秋風をつかみそこねし立くらみ
獺祭書屋主人の忌なり修しけり
壇に挿す子規庵よりの赤のまま



重からむ土葬の子規に曼珠沙華

紅走る午前十時の酔芙蓉

もう一度酔うて死にたし酔芙蓉

きちききちきはがね鋼の音のばった飛ぶ

雲にあそぶ上の棚田の赤とんぼ

栗剥くや百年後のこと思ふ

芋の露力つくして百歩行く

豊作や花器となりたる火消壺

無月かな赤きりんごのうさぎ来て
一本の村を出て行く月の道
名月やわれも過客の一人にて
夢に恋ふ月の田端の大龍寺
満月のイソツプ橋をたもとほる
掛籠に朝顔終の一花かな
雁渡る新宿駅に馬水槽
嫂あねひとり障子洗つてゐる頃か

四十五周年を迎えて

神蔵 器

「風土」は本年十一月号をもって四十五周年を迎えました。初代神山杏雨から石川桂郎、平本くらら、そして神蔵器と四代にわたっているわけですが、今日、創刊からの人は一人もおらず、桂郎を知る人も少なくなりました。

しかし、「風土」に参加し、同じ志を持つものは歳月の長短に拘らず、「風土」の歴史と桂郎の衣鉢を受け継ぎ、誇りをもってその時代を支え、作品第一に努力し心血を注いで来ました。同人、会員、誌友の皆さんに深く感謝しております。またこの間、外部からも深いご理解と温かいご声援を常に頂いてきましたことに厚くお礼を申し上げます。

私事で恐縮ですが、私は八月二十五日朝、突然倒れてしまいました。直ぐさま救急車で佼成病院に入院となりましたが、幸いCTの検査の結果頭に異状はなく、意識も自分でははつきりしていたつもりです。医師は「何も考えないで安静に」と言われましたが、人間眠らず目を開いていて、何も考えないことが、どれほど難しいことか……。

四十五歳はもう立派な大人です。入会してまだ数年の会員の方は別として、同人の皆さんは一人一人志を高く、自分の納得のゆく自分の俳句を大胆且つ繊細緻密に作って下さい。自信を持つことも必要です。そして沢山句を作ることです。沢山作っていると、つまらない句には自分で飽きます。また沢山作っていると、自分でもびっくりするような句が出来る筈です。私は今度の病気を機に、生命ある限り自分の俳句を作って行くことを決めました。

椿山荘での45周年の祝賀会は、私のために申し訳なかったが、来春の桜の時にでもいたしましょう。

冬の禽

森屋 慶基

り んご 挽ぐ 空の 一隅 熱気球
幹の 朽ち 隠し 果せぬ 蔦紅葉
なり はひの 一つ 片づく 刈田かな
葦の 穂を 風の 梳きを り古戦場
憚りの なきこと 寂し一と 嚏
真つ 青な 空に 風あり 冬帽子
小 走りに 日差し の 遊ぶ 大根引
蜻蛉の むくろが 石に 枯れ 日差し
関の こゑとも 枯尾花 たたく 風
囲ひ 戸の 奥の 鈴の 緒神 還る
冬も みぢ 兵糧倉 の 跡あたり
天皇 の 御立 所跡 や 雪 囲
板戸 鳴る 鮒 荒れの 社かな
十六の 阿羅漢 数ふ 虎落 笛
著 莪の 葉の 緑の 深き 師走 かな



第27回桂郎賞俳句部門入選

黝々と鳥海山聳てり冬落暉
杉山の漆黒抜くる冬満月
風花の空の藍より煌めけり
斥ものみやま候山みち細ぼそと笹子鳴く
炉辺ばなし雁の乱れのくだりかな
雪の上に風の引き抜くねこじやらし
杉山へ風のぶつかる冬至粥
凍て雲の一枚沼の白びかり
義家のきびすを返す雪の濤
戦乱の年表系凶踏込炉
神杉の根元の揺らぐ吹雪かな
氷砕く足音一步づつ夜へ
耳朶を押しつつむ闇木菟啼けり
城下町雪のあはひへ雪卸す
蒼天や谿を縫ひ行く冬の禽

諏訪の神

中根 美保

案内くれし人は見てみず御神渡り
二つ現れひとつこまやか御神渡り
御神渡り枯葦の辺に乗り上げし
水底に揺るる影あり御神渡り
御神渡り鋭き光差し交す
遷座祭をみなが笙をたてまつる
雪の中六とせの痩せや御柱
御柱祭湖畔のあをみきぬ
曳き出だす一の柱や山笑ふ
山出しに諏訪の桜のひらきけり
山桜木落し坂へ足はやる
木落しを待つ花筵そのままに
瓢箪を腰に提げし児御柱
号砲のこだま幾重ぞ御柱
木遣節芽吹の谷に応へ合ふ



第27回桂郎賞俳句部門入選

春光の坂踏ん張つて綱こらふ
乗り手らの手振り揃ひて御柱
綱を断つ気合の斧や御柱
御柱叫びもろとも坂を落つ
土煙あげ木の滑る春の山
幣かかげ運ぶ担架や御柱
次に落す御柱待つ日永かな
榎檜咲く里へ曳き来て御柱
建柱茅花流しとなりけり
生きてゐし枝払はれて御柱
投げられし綱に当たるや夏帽子
さまざまな訛行き交ひ御柱
うしろより別の木遣や御柱
御柱森をそびらに立ち上がる
御柱祭の泥をつけ戻る

風土集



神蔵器選

月明の沖を流るる紺の潮 横浜 近藤幸三郎

胸を張る琉歌の舞や赦免花

托鉢の僧列去りて秋の風

水分の石も乾きて風の盆

団栗落つ神代の音を立てて落つ

一滴を硯におとす原爆忌 佐倉 松崎 雨休

健次忌やさすれば浮かぶ腕の傷

秋立つや男がみがく足の爪

地球儀の日本赤き敗戦日

晩年に付きし握力新松子

夕虹の原 発 蔵 す 湾 跨 ぐ 藤枝 間島あきら

夏蝶の風乗り換へる高さかな

赤蜻蛉乱舞に規律あるらしく

種の浜へ海を上り来大夕立

夏の果雲はダヴィデの塑像めく

青年ひとり太宰治の墓洗ふ 横須賀 平田紀美子

来ぬ秋の玉川上水通りかな

玉川上水の橋の名美し法師蟬

「晶子百首」月下美人の一世かな

イヤホーンにアルトの息やヒロシマ忌

娘に残す白桃剥く手みづみづし 大和 落合 絹代

あかときの風立秋と諾ひぬ

秋めくと珊瑚の紅を身に飾り

自転車の籠に待つ犬赤のまま

出雲和紙展きて偲ぶ盆の月

月下美人夜のしじまの通り過ぐ 三鷹 布施まさ子

墨の香のむらさき立てり今日の秋

夢の字の一画うすれ秋扇

目つむりて一分八月の祈りかな

姉の髪の毛の長かりし頃鳳仙花